



【第2期(11月27日頃まで)展示品一覧】 ※第1期より、着色している資料の展示を変更しています。

展示品名	成立年など	所蔵
古事記	和暦5(712)年	個人蔵
日本書紀	推古4(720)年	宮坂文庫
藤氏家伝	天平宝字4(760)年	個人蔵
時風藻	天平勝宝3(751-752)年	宮坂文庫
代方集	奈良時代末	資料館蔵
平家源寺縁起	長和4(1015)年	個人蔵
平家物語	平安時代前期	宮坂文庫
時日本絵巻	平安時代後期	宮坂文庫
代庵中抄	平安時代末	個人蔵
宇治拾遺物語	鎌倉時代前期	個人蔵
鎌倉平家物語	鎌倉時代	宮坂文庫
源義抄	承久1(1219)年	宮坂文庫
時水鏡	鎌倉時代初期	宮坂文庫
代源平盛衰記	鎌倉時代末期	宮坂文庫
室太平記	室町時代	宮坂文庫
室宇治拾遺	室町時代	宮坂文庫
時神皇正統記	南北朝時代	宮坂文庫
代二人静	成立年未詳	宮坂文庫
大和名所図巻	寛政3(1791)年	資料館蔵
江袖摺山(未刊謡曲集)	江戸時代	個人蔵
戸御影山(未刊謡曲集)	江戸時代	個人蔵
代春山物語	文化5(1808)年	資料館蔵
長等の風	江戸時代後期	個人蔵
代天竺堂	江戸時代後期	個人蔵
代發行者大塚集	江戸時代中期	個人蔵
近総合日本史概説	昭和7(1932)年	宮坂文庫
近新訂日本二千六百年史	昭和15(1940)年	宮坂文庫
町原室と国勝	昭和15(1940)年	宮坂文庫
代内州古野旧事記	成立年未詳	宮坂文庫
大塔宮之古野城	昭和12(1937)年	資料館蔵
伝奈良県古野町誌	平成9(1997)年	資料館蔵
藤巻道員・様(黒皮・白皮)	—	資料館蔵
現3月大歌舞伎	昭和33(1958)年	個人蔵
ウオーゲーム 日本史19	平成25(2013)年	個人蔵
DVD戦の帝王 壬申の乱	平成30(2018)年	個人蔵

※本陳列は、「壬申の乱」が登場する作品全てを紹介するものではありません。

展示品名	作者	発行	刊行年	所蔵
尚さす	永井路子	読友新聞社	1988	個人蔵
能楽のかたり 権児板	澤田 純子	淡文社	2019	個人蔵
宇宙皇子1	藤川 桂介	角川書店	1984	個人蔵
かかみ野の土	赤塚 憲久	小峰書店	1988	個人蔵
蘇我の娘の古事記	岡野 柳	角川書店	2017	個人蔵
キサキの大仏	奥山 景布子	中央論新社	2012	個人蔵
妖の安布	阿木村 重	講談社	2002	個人蔵
大津皇子	生方たつる	角川書店	1978	個人蔵
町田 俊子	幻冬舎 MC	2015	個人蔵	
若井 万福	三響房	2003	個人蔵	
文通源流	渡辺 孝	文芸社	1985	個人蔵
名残の飛鳥	大森 遼	柏樹舎	2008	個人蔵
新羅花鳥	宇田 伸夫	近代文芸社	2001	個人蔵
天女の皇子東下り	曹田 有恒	講談社	1990	個人蔵
壬申の乱 皇帝の帝王	樋口 茂子	PHP文庫	1996	個人蔵
・歴史3	梅原 重吉	幻冬舎	2015	個人蔵
大友皇子の母	藤 里 良子	新人物往來社	1989	個人蔵
大海人皇子	浜田 けい子	さ・え・ら	1983	個人蔵
呪力戦記 壬申の乱	藤川 桂介	ネスコ	1997	個人蔵
大海人皇子秘話	長 弓 崇	川柳書店	2011	個人蔵
天の川の太陽 下	黒岩 寛	中央論新社	1985	個人蔵
赤き奔馬の如く	倉橋 寛	風媒社	2011	個人蔵
女人たちの壬申の乱	横岡 朝子	中目新聞社	1983	個人蔵
聞の左大臣	藤原 重吉	集英社	2006	個人蔵
日輪の賦	澤田 純子	幻冬舎	2013	個人蔵
松ふらむ鳥は	毎日新聞出版	2022	資料館蔵	
丹生都比売	梨木 香歩	原牛林	1995	個人蔵
采女のお忍	高田 崇史	新潮社	2021	個人蔵
白鷺の嵐	町田 俊子	読友新聞社	2011	個人蔵
恨は湖原に燃ゆ	黒岩 寛	文藝春秋	1993	個人蔵
千トラ・ボックス	池澤 夏樹	KADOKAWA	2017	個人蔵
火の鳥 太陽の巻	手塚 治虫	KADOKAWA	1986	個人蔵
天龍る月星	長岡 良子	秋田文庫	2003	個人蔵
天の果てへの廻り	大和和紀	講談社	2007	個人蔵
・天の虹	甲中 謙智子	講談社	1988	個人蔵
天つ笛鳴	河村 忠利	秋田書店	2000	個人蔵
天宮の手記	甲中 謙智子	読友新聞社	1992	個人蔵
ふることごと	風越 潤一	マックガゼン	2020	個人蔵

現代小説



【企画・展示】吉野歴史資料館 【会期】令和4年4月2日～11月30日 ※ご入館は資料館開館日に限ります。

## 1. 2022年は「壬申の乱」から1850周年

時をまかのぼること1850年まえ、日本の古代史上で最大の戦乱ともいわれる「壬申の乱」がおりました。このたがいは、「乙巳の変(大化の改新)以降の時代を、歴史的に方向にまなできた天智天皇(中大兄皇子)が亡くなったあと、その後継者を巡っておこされました。争ったのは、天智天皇の弟、大海人皇子と天智天皇の皇子・大友皇子。このう大海人皇子は、乱がおこるまえの半年間を吉野宮ですごし、吉野宮を出発してたがいに挑んだのでした。

吉野宮を出発した大海人皇子は、道中で皇子(高市皇子)と合流し、不破(関ヶ原)をめぐります。桑名で夫入の磯野員実を助げ、皇子の高市皇子を中心に体制を整え、大友皇子のいる大津宮へと攻めこんだのでした。

同じとき、いまの奈良県内では大伴吹負ひまいる別働隊



壬申の乱、大海人皇子の進軍ルート(左・吉野から不破へ、右・不破から大津宮へ) ※赤字は主な戦場

(大海人派)がたがいをくり広げていました。そして、大伴吹負の動きを大海人皇子に報告したのが大伴安麻呂。令和で一躍有名となった、あの大伴旅人のお父さんだったのです。壬申の乱で大伴安麻呂が活躍しなければ旅人の世もななく、「令和」の言葉はうまれなかったかもしれません。

## 2. 「壬申の乱」を人々はかく語りき

「壬申の乱」のおもしろいところの一つに、たがいが終わった後もさまざまな文学作品で語り継がれたことが挙げられます。しかも、語り継がれるたびに、その時代時代の思いや解釈がかわられ、まるで伝言ゲームのように、少しずつ話の内容がかわっていくのです。

本陳列では、1850年にわたる「壬申の乱」伝言ゲームの様子を、本と市内にのこる伝承を通してご紹介いたします。



四唐の壬申の乱があらはれる。

『古事記』序文（歴史書）

壬申の乱は、大海人自らが天皇となるべく、時期をまっけて吉野で準備をし、大友皇子らを討伐した戦いだったと記す。

『日本書紀』天武天皇の条（歴史書）

部下から「大友が人夫を集め、戦の準備をしている」と聞いてたため、大海人皇子は戦いを決意したと記す。

『懐風藻』大友皇子の条（漢詩集）

大友は、知識も文才も素晴らしいがために、壬申の年に乱にあり、天寿を全うできなかったと記す。

『藤氏家伝』（伝記）

壬申の乱について、藤原鎌足が生きていれば、このようなことにはならなかったのに、皆残念がったものだ、と記す。

『万葉集』（和歌集）

瓦腐した大津宮を詠んだ歌、亡き高市皇子の活躍を称えた歌、吉野に向かう時を想起した天武天皇の歌などが載る。

『続日本書紀』聖武天皇の条（歴史書）

「五節の舞」について、大海人が吉野で琴を弾いていた時、天文の舞を見たことが由来と紹介する。

『薬師寺縁起』（縁起）

本願大海人の業縁を記す。大友が大海人をねえみ、反逆を計画した。そのため大海人は伊勢國で兵を集めた、と記す。

『日本紀略』（歴史書）

部下から「大友が人夫を集め、戦の準備をしている」と聞いてたため、大海人皇子は戦いを決意したと記す。

『塵中抄』（故実書）

大海人は香宮であり続けたのは本位ではないと吉野に出家した。後に、大友が吉野を襲おうとしていると聞き、決起した。

参考）『竹取物語』  
かくや姫に求婚する貴族たちの名前が、壬申の乱ゆかりの人物になっている。

『宇治拾遺物語』（説話物語）

大友は常々、次期天皇を組んでいた。吉野の大海人を襲おうと軍を整えたが、大友の妻が大海人に密告し、叶わなかった。

『平家物語』・『源平盛衰記』（軍記物語）

仁王の拳兵を大海人に例える。大友に襲われた大海人は少人数で拳兵し、天下泰平を成し遂げたと、決起を鼓舞する。

『愚管抄』（史論書）

大海人は天智がら譲位されたが、即位する気はなかった。大友に襲われそうなることを知り、戦いを決意した、と記す。

『水鏡』（歴史物語）

天智没後、即位した大友。なお大海人を疑い、吉野宮を襲おうとした。大海人は吉野を逃れ、尾張美濃の兵と共に戦った。

飛鳥時代

奈良時代

様々な立場の見解が記される

平安時代

大友皇子の逸者説が始められる

鎌倉時代

大友皇子の即位説が定着する

それぞれの時代、人々は「壬申の乱」をかく語りき

南北朝時代

室町時代

南朝、大海人にあやかり吉野へ。大海人皇子が幼児化する。

江戸時代

大海人ゆかりの地が観光地化。

大友逸者説がまだまだ一般的。

大友皇子の評判の見直しが始まる。

明治以降

大友皇子即位説が定着化する。

壬申の乱は皇族の争いではない!

戦後、戦前史観の見直しへ...

『太平記』（軍記物語）

後醍醐天皇を迎え入れるべきが、吉野山の宗徒が検討した時、大海人皇子の先例をもとに判断がなされている。

『吉野拾遺』（説話集）

豊明の節会のあと、後醍醐天皇は京都の百中との逢いを敷き、大海人が天文をみたといい袖振山を見て歌を詠んだ。

『神皇正統記』（歴史書）

大海人は太子の位を大友に譲って吉野に入った。しかし、大友はなお危機し、吉野を襲おうと計画した。

『二人静』（謡曲）

静御前の亡霊の自撮りシーンで、「昔淨見原の天皇、大海の皇子に襲はれて、かの山に踏み迷ひ…」と出てくる。

『大和名所図会』（地誌）

吉野山の名所「袖振山」を天文がここで舞ったのが名前の由来と紹介し、参考に大海人が琴を弾いた記事を紹介する。

『袖振山』（謡曲）

吉野山に花見に来た人が、里人に案内を頼む。大海人所縁の袖振山の話を聞いた夜、琴を弾くと、天文が舞うのを見る。

『御影山』（謡曲）

筑紫から吉野山を訪れた僧が、御影山の由来について、清見原が天文の舞を見た時、その影が映ったからだと教わる。

『春雨物語』（小説）

大海人が吉野に逃れた時、天文が五人舞い降りて舞ったのが由来なので、五節舞は五人の女性で行うのが式だと解説。

『長等の風』（史論）

大友が暴役とする評価を疑問視し、天智天皇崩壊から天武天皇即位までの間、大友皇子が即位していたはずだと主張。

『大日本史』（歴史書）

大友について、『懐風藻』や『水鏡』の文章を検討し、即位して弘文天皇となっていたと見えるべきだとした。

『役行者大峯桜』（戯曲）

大海人と大友（先帝が官女に生ませた行方不明となっていた）として大友を擁護する群臣派の争いを描く作品。

『和吉野日野日記』（由緒書）

大海人が位を譲って吉野に逃れた時、大友が吉野宮を襲った。國栖人が大海人と和田山の洞くりに匿ったと記す。

『総合日本史概説』（解説書）

大友は大海人の謀反に構えていたが、大海人は身の危機を感じて拳兵した。大友は即位していたというが、異論も多い。

『新訂 日本二千六百年史』（解説書）

壬申の乱は、急激なる改革に不満をもった保守貴族の手によって起こされたものであったと解説する。

吉野町内のお寺の縁起や言い伝え『日隆寺権杖記』や『金福寺縁起』吉野町内各地の伝承で、大海人になつた話が残されている。※日隆寺は現存せず。



※吉野町内の伝承については、『吉野町内の古代ゆかりの場所』リーフレットもご覧ください。